

エドワード・W・サイードのポストコロニアル批評

—— 文学作品と政治的適正 ——

倉 持 三 郎

1 ポストコロニアル批評とは何か

「ポストコロニアル」は文字そのものの意味は、「植民地独立後の」ということである。「コロニアル」という言葉から連想できるように、「ポストコロニアル」は、かつてのヨーロッパ列強が支配していた、アフリカ、アジア、南アメリカなどの植民地に関することである。『ポストコロニアル研究論集』(*Postcolonial Studies Reader*)によると、「ポストコロニアル」という言葉は、かなり広い意味で使われていることが分かる。たとえば、その論集では、旧植民地のナショナリズム、人種、フェミニズム、言語、教育などの項目があげられている。その分類の「表現と抵抗」という項目に、ここで取り上げるサイードが入っている。

この批評の趣旨をまとめれば、従来、無批判的に受容されてきた価値、たとえば、「文明の恩恵」とか、「イギリス文学の遺産」とかにたいして、旧植民地が異議を唱えるということである。なぜ異議をとнаえるかという、それらの価値は表向きはいいが、実際は、帝国主義が植民地を支配するのに都合がよい価値だからである。

逆に言えば、かつての植民地が、それぞれの文化、民族意識に目覚めてきたということである。この動きは、その国にとどまらず、英米の批評にも影響をあたえている。なぜならば、旧植民地出身の批評家がアメリカにおいて活躍しているからである。

この批評活動はどの方向に向かうであろうか。各民族のナショナリズム

を高めると同時に、究極的には、どの国の人間も世界の市民として平等であるという認識に向かうであろう。これも不当におとしめられていた民族が、それぞれの自国の文化に自信をもち、支配民族も、被支配民族の文化を認めることになる。その点では、この批評は、一見、民族間に争いの種を蒔くように見えるが、最終的には実り多いものをもたらすはずである。

2 パレスチナ人、サイード

ポストコロニアル批評として現在名前があげられている者には、サイードのほかに、ホミ・バーバ Homi Bhabha, ガヤトリ・スピヴァック (Gayatri Chakravorty Spivak) チヌア・アチェベ (Chinua Achebe) などがいる。それぞれ出身の国が違うから、発言の内容は異なるが主張の大筋は同じである。

本論であつかうエドワード・W・サイード (Edward W.Said) は、現在はコロンビア大学の英文学と比較文学の教授であり、アメリカの批評界において重要な役割をはたしている。彼は、1935年に、イギリスの信託統治下のエルサレムに生まれた。家族はキリスト教徒である。しかし、現在、彼自身は、キリスト教にも、イスラム教にも属さず、「世俗」の立場にあるという。1948年のパレスチナにおけるイスラエル建国をめぐる紛争を逃れて、サイードは、家族とともにエジプトへ逃亡した。カイロのイギリス人学校で学び、中等教育と大学教育をうけるためアメリカへ渡った。プリンストン大学で英文学と歴史を研究した。ハーヴァード大学でハリー・レヴィンの下で、ジョウゼフ・コンラッドについて博士論文を書いた。

サイードは、現代有数の学者である。彼がしばしば言及するアウエルバッハ、クルチウス、スピッツナーに並ぶほどの学者であるとされている。アラブ語、英語、フランス語は、当然のこととして、ドイツ語、イタリア語、ラテン語に通じ、文献学の造詣が深い。また西洋音楽にもくわしい。

学者であるが、サイードは自分の専門の殻に閉じこもらず、広く国際社会について発言している。言語学者、チョムスキーのベトナム戦争批判を

例に出しながら、これが知識人のあるべき姿であるとする。「ベトナム戦争についてチョムスキーが提出した資料は、資格のある専門家が提出したものより、規模と正確さにおいてずっと上である」⁽¹⁾と言う。

このようにサイドが政治的な発言をするようになったきっかけは、彼が、家族を訪問するために、アンマンとベイルートを訪問したことである。そこで、親戚、とくに、詩人のカマル・ナセルと親しくなった。ナセルは、イスラエル建国によって失った祖国回復を目指す PLO のの活動に参加していたが、72年には、イスラエルの暗殺団によって殺された。ナセルを通して、サイドは、パレスチナ問題に関心を向けることになった。そのあと、サイドは、パレスチナ国民議会のメンバーになった。ただ、サイドの言葉によると、政治団体に正式に入ったことはないと言うから、彼には、これが政治的活動であるという認識はないのであろう。⁽²⁾

70年の後半に、サイドは、パレスチナ問題に関する彼の基本的な姿勢を示す、三部作、『オリエンタリズム』(*Orientalism*, 1978)、『パレスチナ問題』(*The Question of Palestine*, 1979)、『イスラム報道』(*Covering Islam*, 1981)を執筆した。これらの著作で、パレスチナ問題について、パレスチナ人側の立場に立つ発言をしている。マスコミが中心になって、アラブ人は、テロリスト、野蛮人、狂信者というイメージをつくっているが、それが、いかに一方的なものであるかを指摘している。

ここで、サイドが著作のなかで、しばしば言及する、フランツ・ファノン(1925-61)について述べておきたい。ファノン(1925-61)は西インド諸島のフランス領マルチニック島で生まれた黒人であるが、後、精神科医になった。マルチニック島の黒人は、アフリカの黒人よりも開化されていると言われ、彼自身もそう思っていた。それで自分を白人と錯覚していたが、ある日、白人から「ほら、ニグロがいるよ」と言われ、自分の実体に気が付いたという。『黒い皮膚の白い仮面』という彼の著書の題名は、その状況を表している。

1953年、ファノンは、アルジェリアの精神病院に勤務することになった

が、その翌年にアルジェリアのフランスからの独立戦争が始まった。フランス軍による徹底的な弾圧と拷問のために精神異常をきたした患者の症状を彼は『地に呪われた者』で記録している。精神病院を辞め、彼自身、独立戦争に参加して、論陣を張った。暗殺も奇跡的な逃れたが、アルジェリアの独立が承認される前年の61年白血病でなくなった。サイドは、ファノンの精神の継承者であると言ええる。

3 「オリエンタリズム」とは何か。

『オリエンタリズム』には、サイドの思想と学問が非常によく現れている。「オリエンタリズム」という言葉は、「オリエント学」、「オリエント観」という意味をふくめて使用されている。サイドは西欧人が使用する「オリエンタリズム」という言葉に根底から疑問をなげかけている。ようするに「オリエンタリズム」というのは西欧人が、オリエントについてつくりあげた概念であり、実際のオリエントとは違うというのである。

冒頭でそれを説明している。かつてペイルートにいたフランスの新聞記者が、内戦後のペイルートに来たときの印象についてサイドはこう述べている。

1975-76の凄惨な内戦のときペイルートを訪問した、あるフランスの新聞記者は、破壊された中心街について、残念そうにこう書いたのである。

「それはかつては、シャトーブリアンや、ネルヴァルのオリエントであったのに」彼は、その場所について真実を語っている。とくに、ヨーロッパ人から言えばそうなのである。オリエントはヨーロッパ人が発明したものである。そして、昔から、ロマンス、異国情緒豊かな文物、忘れがたい記憶と風景、すばらしい経験の場所であった。⁽³⁾

フランスの新聞記者の感慨は、まさに的を射たものである。ここにはフランスが、自国に似せて都市を築いたのである。ここからも分かるように、

フランス人は、フランス人の好みに合うようにオリエントの都市を造ったのである。このことは、ほかのことについても言えることで、西欧人は、オリエントを自らのイメージに合わせてつくったのである。だから、「オリエンタリズム」は、西欧人の概念であって、オリエントの現実とは違うものである。なぜそうなるのかと言えば、西欧人に言わせれば、オリエントは自らは、自分の概念をつくることができないからである。

『オリエンタリズム』のなかで、サイードはおよそ次のような点を強調している。

1) オリエントの人間は劣等である。

1910年に、イギリス軍がエジプトを占領したとき、イギリスの外務大臣、バルフォアは占領を正当化するような演説をしている。オリエントには自治がなく専制政治しかない。オリエントが偉大であった時代は過ぎた。東洋人は、陰謀をめぐらし、動物を虐待し、高貴さが無い。東洋人は従属する民族にすぎない。だから、征服しても正当であるということである。

劣等な民族であるということは何を意味するか。ダーウィンの進化論を発展させた社会的進化論によれば、オリエント人は適者ではないから生存する権利がないということになる。

2) オリエント学は、過去のオリエントを扱う。オリエント学は、西欧において盛んであるが、そこであつかわれているオリエントは過去のものである。かつてオリエントはヨーロッパにとって重要な文化であった。キリストもこの地方の出身である。ところが、現在のオリエントはあたかも存在しないように扱われている。

帝国主義国が他国にたいしてとって態度の例として、サイードは、1798年のナポレオンのエジプト遠征をあげている。ナポレオンは遠征にあたって、記録するため学者、フリエをとめた。フリエは後に、エジプトに関する膨大な記録を残すことになる。その一節をサイードは引用している。

この国は、ただ、偉大な記憶を提示する。芸術の故郷であり、無数の記

念碑を保存する。その主要な寺院と、国王の住居であった宮殿は、現在に至るまで存在する。そのうちの一番新しい建造物でも、トロイ戦争のときまでには建てられたものである。ホーマー、リクルガス、ソロン、ピタゴラス、プラトンはすべて、科学、宗教、法律を学ぶためにエジプトに行った。⁽⁴⁾

この記述を読むと、エジプトはヨーロッパ文化の一部であるかのような印象をあたえる。とくに関係のあった過去のエジプトについて記載して、現在のエジプトには注意を払わない。遠征によって、エジプトの住民がいかに苦しんだかは分からない。フリエと並べて、サイドは、当時のエジプトのイスラム教の指導者、ジャバルティの記録を引用している。

今年は、大戦闘の時代の幕開けであった。重大な結果が、恐ろしい仕方
で突然生じた。悲慘は果てしなく重なった。日常の行事は乱された。ふ
だんの生活は崩壊し、破壊が襲い、いたるところが荒廃した。⁽⁵⁾

こういう住民の悲慘は事実ではあっても、フランス側には何ひとつ理解
されないのである。

3) 歪んだオリエント像がつくられている。多くのフランス作家はオリエ
ントを旅行して、それを題材に作品を書いた。しかし、そのなかではオリ
エントはかなり歪められている。歪められたオリエントについて読む読者
は、それには気がつかない。それを真実と思って読むから、そこに歪んだ
「オリエント言説」が生じる。フロベールはオリエントを旅行してそこを
描写した。その一例として梅毒患者の悲慘な状態を描写した部分をサイ
ードは引用している。それは事実であるとしても、そういう場面だけを読
ませられる読者は、オリエントについて、歪んだ像をもつであろう。

女性はハレムの女性というイメージが強調され、ほかには女性はいない
かのようである。フロベールの小説におけるオリエント女性の扱いについ

てサイドは次のように述べている。

彼のすべての小説において、フロベールは、オリエントを性的空想の逃避と結びつける。エマ・ボヴァリーとフレデリック・モローは、あじけないブルジョワの生活のなかで、自分たちが持っていないものに憧れる。彼らが持ちたいと思うものは、オリエントの決まり文句、すなわち、ハレム、王女、王子、奴隷、ヴェール、踊り子、男の子、シャーベット、塗油などで一杯の白昼夢のなかに現れる。決まり文句がなじみ深いものであるのは、フロベールが、オリエントを旅行し、オリエントに憑かれていたからではなくて、オリエントが放縦な性的自由と明確に結びつくからである。⁽⁶⁾

このように、オリエントは、ヨーロッパにおいては得られぬ性的自由が得られる場所と考えられたのである。19世紀では、フロベールのほかに、ネルヴァル、バートン、レーンがそれを求めてオリエントに旅行をし、20世紀では、ジッドなどが同様な旅をする。

4 帝国主義と文学作品

『文化と帝国主義』では、サイドは、『オリエンタリズム』であつかった問題をさらに敷衍する。すでに使用している言葉であるが、「帝国主義」を全面に出して文化との関連を論じている。この著書は、中東に限定されず、さらに広く、アフリカ、インド、オーストラリア、アジアなどでの、西欧の旧植民地を論じる。さらに、アイルランドのように白人の国でありながら、他の民族に侵略され支配された国も論じる。

「文化」とは、ここでは政治、経済とは違った、表現、伝達に関するもので、美的な喜びを与えるもののことである。19世紀、20世紀をあつかうので具体的には小説である。だから、簡単に言えば、『オリエンタリズム』で表明された見方を応用して、小説を読むということになる。つまり、故

郷を追われたパレスチナ人としての、抗議を原点にして、自分の専門である英文学やフランス文学の作品を解釈するということになる。そして、文学作品のなかに、英仏などヨーロッパの列強の植民地支配を正当化する言説を読みとっている。

コンラッドの例をひいてサイドはこう言う。

われわれ西欧人がだれがよい原住民でだれが悪い原住民か決定する。なぜならば、すべての原住民は、われわれの承認によってその十分な存在を得るからである。原住民を創ったのはわれわれであり、原住民に話すことや考えることを教えたのはわれわれである。彼らが反乱を起こすならば、それは、彼らを治めている西欧人にだまされたばかりの子供であるという従来の見方を証明することになる。⁽⁷⁾

こういう言説は、イギリス近代小説の始祖である『ロビンソン・クルーソー』にあらわれている。無人島で暮らしていたクルーソーは、人食い人種に食われそうになったひとりの原住民を助ける。その原住民にフライデーという名前をつけて、自分の召使にする。そして英語を教える。ここには、原住民は人食い人種で野蛮であるから、そこから救ってやって、言葉を教えて、文明化しなければならないという考えがある。こういう考え方は、植民地支配に都合がよいのである。なぜならば、もし原住民がすぐれており、文明化されているならば、支配の口実を失うからである。自分が侵入者や圧政者ではなくて、正当な支配者であることを主張するためには、原住民が劣等でなければならない。

クルーソーのように原住民を召使にするという露骨なやり方ではなくても、ヨーロッパ人が中央で、植民地は周辺で、中央のために存在するという考えがある。ジッドの小説『背徳者』には、このような姿勢が出ている。この作品はジッドの精神的自伝である。伝記的事実の方をまず言えば、ジッドは、ピューリタンの禁欲的な戒律のため精神的に行きづまり、それを

打破するため、友人とアルジェリア旅行にでかける。ジッドは同性愛傾向をもっており、女性にたいして欲望がなかった。それを直すため、アルジェで、娼婦を抱いた。しかし、そのときでさえその女性の背後には、アラブの少年にたいする愛があった。

『背徳者』の主人公のミシェルは、篤学の考古学者であり25歳まで、勉強することしか知らなかった。危篤の父親を安心させるため親の気にいる女性、マルスリーヌと結婚した。この人物が、自己に目覚めて、道徳に反する行為をしながらも自己変革していく物語である。

この自己変革のきっかけになっているのが、アルジェリアである。当時は、フランス領であったアルジェリアに、ミシェルと新婚の妻は旅行する。そこで、ミシェルは結核で咯血して死にそうになる。ところが、そのときミシェルを生き返らせるものが現れる。アラブの少年である。バシルという名前であった。

ミシェルが引きつけられるのはその健康な肉体である。

ああ、彼はなんと健康なことだろう。ぼくが彼に惚れ込んだのはこれだ。健康だ。この小さな肉体の持つ健康は美しかった。⁽⁸⁾

バシルがナイフで木を削ろうとしてあやまって親指を切り、血を流す。ミシェルは咯血したとき、自分の血を見ながら、バシルの血を思い出し、突然、生きたいという欲望が生まれるのである。

これはどういう意味をもつのか。たしかに、これをきっかけとしてミシェルは生き返るのであるから、アラブの少年は悪いわけではないが、ここにヨーロッパ人の典型的なアラブ観が出ている。

アラブの少年は、健康な愛すべき肉体をもっているということである。もちろん、この自体はよいことではあるが、しかし、作品を読むと、アラブの少年の誇るべきものは、その肉体だけであるということになる。実際、このあと、ほかのアラブの少年たちが登場するが、それは肉体的な存在で

あり、知的とか道徳的な存在ではない。アラブの少年たちは、ミシエルの自己変革の手段として使われたただけである。物質的搾取ではないが、一種の精神的搾取であるということである。ジッドほどの良心的なフランス人でさえもそれに気がつかない。これをまとめてサイードはこう言う。

この物語は、ヨーロッパの主人が、海外に土地を所有し、それから利益をあげ、それに依存するが、究極的には、自立も独立も拒否するという「態度と言及の構造」をもつ。⁽⁹⁾

サイードの言うことを敷衍すれば、アラブの少年が金を盗んだり、金目当てで行動するのは貧乏だからである。なぜアラブが貧乏かと言えば、フランスに搾取されているからである。そういう現実には注意せずに、肉体だけをほめるのは、アラブ人を正当に評価することではない。経済的に向上するためにアルジェリアが独立しようとするれば、フランスはそれを弾圧することになる。

5 文学作品と政治的適正

サイードは、こういう反帝国主義的見方をとりながらも、古典的な作品をすべて否定するわけでない。『文化と帝国主義』の序文でこう述べている。

わたくしがここで小説やほかの著作を分析するのは、第一に、それらが、評価できる立派な芸術と学問の著作であり、そこに私もほかの読者も楽しみを見出し、得るところがあるからである。第二に、それらを楽しみや、効用だけではなくて、それらが、あきらかに、隠しようがないほど帝国主義の過程に組みこまれていることを指摘したい。そうはいってもその社会の疑い得ぬ現実に関与していることを非難したり、無視するのではなくて、これまで無視されてきたことを学ぶことは、著作の読みと

理解を、実際に、そして、真に高めることになると言いたいのである。⁽¹⁰⁾

その一例として、ジェーン・オースティンの『マンスフィールド・パーク』を取り上げる。

これは、地方の広大なカントリーハウスであるマンスフィールド邸を主な舞台として、子供が多く裕福でない親から引き取られ育てられるファニー・プライスの愛と結婚の物語である。女主人公の愛と結婚の物語とえば、オースティンが繰り返し描いてきたものであり、とくに変わったことではないが、問題は、この邸宅の所有者であるバートラム卿と奴隷制の関連である。卿が西インド諸島のアンティグアに旅をするということにサイドは注目する。実際は、はっきりとは描かれていないのだが、卿はそこで、砂糖栽培の農園を所有して、奴隷を使用して、収益をあげているようである。当時ナポレオン戦争で、砂糖の輸出ができなくなり、経営が思わしくなくなったので、そのため、バートラム卿がアンティグアに行ったようである。

アンティグアの砂糖の話はたんなる作り話ではなくて、作者の父で牧師のジョージ・オースティンの友人 Nibbs はアンティグアに砂糖農園をもち、オースティンの父もその管財人のひとりであったという。⁽¹¹⁾ 作品そのものは、奴隷制を正面から取りあつかうことはないのであるが、バートラム卿の所有する土地も財産も、奴隷制による収益によって支えられていることがわかる仕掛けになっている。邸宅の秩序と平和を支えているのは、奴隷制だということである。

彼女の小説のほかの所にないほど、この作品で、オースティンは、家庭内と国際的な権威を同時に結び付け、聖職叙任、法律、体面というような高級な事柄と結びつく価値は、現実の領土の所有と支配に強く根差していることを明白にする。マンスフィールド・パーク邸を所有し支配することは、帝国の土地を、それと必然的にではないとしても、

密接に関連させながら、所有し支配することなのである。一方の家庭的な平穏さと、魅力的な調和を保証するものは、外地の生産性と厳しい管理である。⁽¹²⁾

では、このように奴隷制を肯定するような作品をどう見るべきなのか。

オースティンが、奴隷廃止論者か、あたらしく解放された奴隷のように情熱的に奴隷制度を非難することを期待するのは愚かであろう。しかし、従属民族、少数派、恵まれぬ人達は、非難のこもった言い回しで、白人で、特権階級で思いやりがなく、共犯者だとして、過去にさかのぼって彼女や似たものたちを攻撃する。オースティンが奴隷所有社会の一員であったことはたしかだ。しかし、彼女の小説を美しいだけのくだらぬ代物として捨てるのか。それは反対だ。⁽¹³⁾

結 論

文学作品をどう評価するかは難しく、一筋縄ではいかない。、『マンスフィールド・パーク』を奴隷制と結びつけて論じることにも一理はある。たしかに、この大邸宅所有の背後には、西インドにおける奴隷制による砂糖農園経営があることは否定できない。そして、この邸宅の生活にあこがれるだけの読みかたをすれば、それは、奴隷制度を暗黙のうちに肯定する態度につながるであろう。小説を読む場合も、そうではなくて、あらゆる人間の権利の平等を目指す「政治的適正」(political correctness)の立場も読みこむことが必要だということである。

読者は、奴隷制度農園のことを知らなくては、この作品を読めないかというそうではない。ヒロインのファニー・プライスは、財産がなく子沢山の家庭の長女であり、口減らしのため邸宅に預けられるのである。もちろん、ファニーは、仕事をさせられるわけではないが、10歳くらいで、口減らしのため他家にあずけられた少女の苦しみを読者は理解し、同情でき

る。周囲の金持たちから受ける軽侮による心の痛みも理解できる。このような哀れな彼女は最後には、よい相手に恵まれて、結婚できると結ばれており、読者は安堵する。

奴隷制度のことに気が付かなくても、ファニーの境遇に同情できれば、この作品を読んだことになる。ただ、サイードの指摘したように、当時のイギリスの植民地支配という現実をこの作品から知ることは、ファニーの境遇に同情することと矛盾はしないのであろう。要は、サイードの言うように「作品の読みと理解を高める」ことが重要である。これが、作品を豊かに読むということである。

注

- (1) *Representations of the Intellectuals*, p.79.
- (2) *Edward W.Said: A Critical Reader*, p.7.
- (3) *Orientalism*, p.1.
- (4) *Culture and Imperialism*, p.33.
- (5) *Ibid.*, p.34.
- (6) *Orientalism*, p.190.
- (7) *Culture and Imperialism*, p.xviii.
- (8) 『ジッド』 274頁。
- (9) *Culture and Imperialism*, p.193.
- (10) *Ibid.*, p.xiv.
- (11) 海老根宏「カントリー・ハウスと奴隷制度——E.サイードのオースティン論をめぐる——」（『英国小説研究』18冊、参照）
- (12) *Culture and Imperialism*, p.87.
- (13) *Ibid.*, p.96.

参 考 文 献

Edward W.Said: *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography*.

1966. UMI,1996.
- : *Beginnings: Intention and Method*, Columbia University Press, 1975. (邦訳『始まりの現象——意図と方法』法政大学出版局、改訂再版、1996)
- : *Orientalism*. Penguin Books, 1978. (邦訳『オリエンタリズム』平凡社、1993)
- : *Covering Islam: How the Media and the Experts Determine How We See the Rest of the World*. Pantheon Books, 1981. (邦訳『イスラム報道』みすず書房、1996)
- : *The World, the Text and the Critic*. Harvard University Press, 1983. (邦訳『世界・テキスト・批評家』法政大学出版局、1995)
- : *Musical Elaborations*. London: Vintage, 1992. (邦訳『音楽のエラボレーション』みすず書房、1996)
- : *After the Last Sky: Palestinian Lives*. Vintage, 1993. (邦訳『パレスチナとは何か』岩波書店、1995)
- : *Representations of the Intellectual*. New York: Vintage Books, 1994. (邦訳『知識人とは何か』平凡社、1995)
- : *Culture and Imperialism*. New York: Vintage Books, 1994.
- : *The Pen and the Sword: Conversations with David Barsamian*. AK Press, 1994.
- : *The Politics of Dispossession*. Vintage, 1995.
- : *Peace and its Discontents: Essays on Palestine in the Middle East*. New York: Vintage Books, 1996.
- : *Peace Process*. New York: Vintage Books, 1996.

B. Ashcroft, G. Griffiths, and H. Tiffin (eds) :

The Post-colonial Studies Reader. Routledge, 1995.

Michael Sprinker (ed.) : *Edward Said: A Critical Reader*. Blackwell, 1992.

Terry Eagleton, Said : *Nationalism, Colonialism, and Literature* (邦訳『民族主義、植民地主義と文学』法政大学出版局、1996)

『ジッド』(新潮世界文学全集28) 新潮社、1994。

富山太佳夫編『ニューヒストリシズム』研究社出版、1995。

————『文学の境界線』研究社出版、1996。

フランツ・ファノン：『地に呪われたる者』みすず書房、1996。

『英国小説研究』同人、『英国小説研究』18冊、英潮社、1997。

山形和美編『差異と同一化——ポストコロニアル文学論』研究社出版、1997。